
めえる ういっち

黒猫亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めえる ういっち

【Nコード】

N1123F

【作者名】

黒猫亭

【あらすじ】

絶世の美女にして最強の魔女である西園寺優香は私立清應高校の一年生（ ）。性別を隠して十六年間にトラブルなしで生きてきたけれど、はたしてこのままうまくやっていけるのかな？使い魔「黒子」の視点で語られる現代魔女喜劇。

第1話：自己紹介

はじめまして。まずは自己紹介を。

わたしの名前は西園寺黒子。東日本亜人協和会の理事長であられる西園寺京香さまのお力により生を受け、光栄にも西園寺の姓を与えられた第一階級の使い魔であります。

黒猫と蝙蝠を主たる触媒として生成されたがため、京香さまに黒子と名づけられました。あ、笑ってはいけません。わたしはとても気に入ってるんですから。

ええと、得意技は「隠密」と「飛翔」、「眩惑」と「変化」、それと風の魔術全般。かように強大な能力をたまわったのも、すべてはあるお方をお守りするため……。

順々に説明します。

西園寺家は魔女の名門。魔女であれば国内で知らぬ者はいません。欧州の魔女界においてもその名は高く、“Witch Saionji”と聞けばイコール「東洋の魔女」と誰もが常識のごとく認めるところです。

魔女そのものについても言及しておきましょう。

魔女とは、地水火風ありとあらゆる魔術に長じ、人心を操り四足獣を統べ、重力に抗い、夜空を愉しむ者です。

人間は魔女をモチーフにして気軽に絵本や漫画、小説を書いたりしていますが、現実の魔女はきわめて稀なる存在であり、君主級の吸血鬼に匹敵する魔力を持っています。

魔女といえば「魔女狩り」が歴史的に有名ですね。でも、あれの犠牲になった魔女はひとりとしていませんよ。焼かれたのはあわれな貧しい農婦ばかり。魔女が本気になったら、それがどれほど未熟で怠惰な魔女であっても、並みの人間では太刀打ち不可能です。聖

騎士と司祭の混成小隊でようやく五分といったところ。なお、高位の魔女が放つ「魅了」と「眩惑」の力はほとんど「支配」に近いため、聖地保管100年以上の耐魔重装でもまとわなければ、はなから戦いにもなりません。

しかし、それでいて魔女の弱点は「人間」なのです。人間が近寄ってくると……その、激しい頭痛に襲われるらしいのです。これがまさしく頭痛の種。この微妙な体質のせいで、「それでも人間となかよくやっていくべき」とする共存派と、人間を忌み嫌い「天敵として討つべし（頭痛いし）！」とする敵対派とに分かれ、古代より延々ずつといがみあっているのです。

なお、亜人協和会は、共存派からなる亜人組織で、構成は魔女や人狼、天狗や古狐、吸血鬼や魔人などさまざま。亜人ばかりではありません。人間社会に溶けこめる種族、という意味合いで「亜人」。組織は東日本と西日本とに分かれ、年に数度、会合と茶話会が催されています。なお、こういった人外の存在を知る人間は政府高官などごくひとにぎり。宗教勢力の上層部とも持ちつ持たれつです。

さて、共存派の魔女は歩み寄りの施策として頭痛薬を作りつづけてきた一派。あ、ちなみに西園寺家はですね、みなさんもご存知であろう「西園寺製薬」を取り仕切っているんですよ。テレビのコマーシャルでも有名な鎮痛剤『ルナル』は人間用ですが、あれの5倍ほどの効果を持たせた『グルナル』というのがありまして、魔女用として秘密裏に流通しています。むろん薬局では売っていません。『グルナル』は一錠で24時間効き目バツグンのすぐれものなのですが、なにやら誘眠効果も強いらしく、だからか共存派の方々はいつも眠そう。

敵対派には小さな組織がたくさんあり、また組織間の小競り合いも絶えないようで、全貌は模糊としています。

話がちょっとそれたかも。そろそろ本題に。

魔女は「魔女」でありますから、当然のことながら女性しかおりません。出産に關しましては、低級の魔女であれば、氣に入った人間の男性を魔の領域に招きゴニョゴニョしてアレなわけですが、高位の魔女であれば「不死の秘術」をもって自分自身を再構成し、懐胎出産します。君主級の吸血鬼や人狼の王族であれば高位魔女の伴侶として相応なのですが、まあ恋愛の問題はなかなかむづかしいですし、異種配合には危険が伴うとか伴わないとか。まあ、そこらへんの事情はわたしもよく知りません。ええと、ともかく、生まれるのは必ず女性なんです。だって、魔女ですものね。

さて、京香さまが「不死の秘術」をもってご出産されたのが十六年前。お子のお名前は優香^{さち}。神々しいまでにうつくしく、胸をとるかすほどかわいらしい、女の子のような《男の子》なでした。

前代末聞！ 吉兆なのか凶兆なのか、一切が謎。わたしが生を受けたのはその半年後です。京香さまは優香さまを、あくまでも「魔女」として教育していくことを決心されたのでした。

共存派も一枚板ではありませんからね、「男性の魔女」なんて明るみになれば、どんなそしりを受けることやら。しかし、そんな理由から魔女教育＝性別秘密の徹底を決心されたわけではありません。優香さまの魔女としての天質は成長を待つまでもなく明々白々だったのです。禁止魔具の魔力計（魔力計は差別的でよろしくない、と協和会でつねづね問題視されています。見かけは体温計とほとんど同じ）によれば、揺籃のころよりすでに京香さまのお力を凌駕していたとか。つまり、西園寺家の跡を継ぐにふさわしい魔女として期待されもしたわけなのです。

でも、本当の理由は……たぶん、その、優香さまが頭のとっぺんからつま先まで、どこからどう見ても百パーセント女の子にしか見えなかったからだと思います。超かわいいんです。実際、京香さまは優香さまにもうメロメロ。あれぞまさしく舐犢の愛。もつとも、そのお気持ちは私にだってわかりすぎるほどわかりますけどね。な

んていうか、可憐で、清楚で、それでいて凜としていて、笑顔がまぶしくて……ああ！　もうたまらない！

ハッ！　話がちょっとそれたかも。ええと、まじめな話、優香さまが「男性の魔女」であることが公になってしまうと、ちょっとしたのがどうなるかわからないですよ。共存派のなかには西園寺家にねたましい思いを抱いている一族もいないことはないですし、敵対派だってなにを言い出すやらわかりません。だって、本当に前例のないことなんですもの。優香さまはそのことについてあまり深くは考えないようにしているみたいですけど、でも、やっぱり不安にかられることはあるみたいで……そういうわけで、わたし黒子が優香さまをお守りしなくてはなりません！

わたしの役目は、優香さまが日々を快適に過ごせるようサポートすること。秘密がなにものにもあばかれぬよう、眼を光らすこと……なのです。

第2話：7時20分

さて、前回の説明で、なんとなくでも状況をのみこんでいただけたでしょうか？　こういうふうに、ひとさまにわたくしどもの事情をお教えるのには慣れていませんで、たぶんわかりづらいところもあつただろうと思います。

でもまあ、みなさんが魔女その他の人外に接する機会はまずありませんので、ごく大雑把な理解で問題ナシですよ。この世のなかには、そういうね、魔女やら吸血鬼やらの超常種がいて、なんとなく人間社会に溶け込んでいる、と。なかには恣意的に人間たちに害悪をもたらそうとするものもいるけれど、そのほとんどは共存派の猛者によってすみやかに排除されています。

問題は例の敵対派です。魔女の領域のみでなく、他種族においてもそういう連中はうじゃうじゃいます。あいつらは計画的で非常にタチが悪い。共存派もそれぞれの種族で戦団を組織して対応しています。敵対派とて人間に存在をおおやけにされることは望んでいないので、隠蔽に関してはラクなんですけどね……。

あと、そうそう、ときどきあらわれるんですけど、人間のくせに超常種を狩らんとする輩もいます。わたしたちとは異なる仕方で魔術的な攻撃を仕かけてきます。かれらはどうも、なんていうか、こちらの社会性というか、共存派の理念などにはまったくの無知で、しかも「聞く耳持たん！」といったスタンスで襲いかかってくるので本当に困ります。唐突に仕かけられたら、こつちだってつい反撃しちゃいますよ。というか、正当防衛ですからね。

……それとあと、ええと、なんだろう、事前に知っておいていただきたいことはこのくらいかなあ。基本的には人間と同じように生活してるわけなのですよ。吸血鬼の人（？）たちだって代替血液で間に合わせていますしね。結局のところ、人間たちが形成している

社会にある種の居心地のよさを感じていて、それを尊重していいこうと、そういうスタンスです。わたしなんかは、生まれたときから人間社会にどっぷり浸かってしまってますから、テレビとかエアコンとか、自動車とか電車とか飛行機とか、いわゆる文明の利器をあたりまえのように受けいれていて……というか、本当にあたりまえなんですよね、感覚的に。人間の友人だつて普通にいますし。

そう、人間の友人だつているのです。わたしと優香さまは、東京都は港区の私立清應高校に通う、ごく普通の女子高生なのです。今年の春に入学して、いまは夏休みが終わったばかり。残暑の厳しい長月。ああ、夏休みが終わってしまった……

ちなみに、清應は超名門なんですよ。偏差値すごいですもん。優香さまはともかく、わたしはすごく苦労しました。京香さまには「もし受からなかったら“優香専属”から降ろすからね！」って笑顔で言われて、もうどうしたらいいかと……。

でも、優香さまが「いつしよにがんばろうね！」って勉強をみてくれたんですね。ホント優香さまのおかげでグングン成績が伸びていって、中学はなんと次席で卒業することになったのです。あ、もちろん主席は優香さま。卒業式では「いやあ、お姉さんのおかげだなあ！」って先生に言われて、それだけでもすごうれしかったけれど、そのときそばにいらした優香さまが、

「いいえ、先生、黒子自身の努力のたまものです。私も負けちゃいけないゾ！って、切磋琢磨できましたもの。私ひとりでは、きつと清應には合格できなかったと思います」って（一字一句おぼえます！）。もー！

ハッ！ 取り乱してしまいましたね、すみません。

現状は要するに、優香さまの妹として清應にもぐりこみ、とりあえず平和な毎日を送っている、といった感じです。いつしよのクラスになるのにちよつとという暗躍させてもらいましたけれど、まあ必要なことなので、優香さまにも怒られませんでした。

優香さまいわくは、

「私たちが本当に、心から人間と共存しようとするなら、人間にとって脅威である私たちの力を自ら封ずる覚悟が必要でしょう。それが人間として生活するうえでの礼儀だと思う。だから、なるべく力を使わないで、黒子にも人間としての生活を楽しんでほしいの。私には、その……秘密もあるし、あなたにそばにいてほしいから、理想論を貫けない弱さがあるけれど、なるべくなら、ね？」とのこと。私の知るかぎり、優香さまが力を行使するのは性別を秘するときのみ。本格的な魔術を西園寺邸地下の「学習室」以外で行使したことは皆無です。

あれ、ええと、いま何時かな？ ん、7時……20分？ あれ？
ちよっ、ヤバ！ 支度しなくちゃ遅刻しちゃう！ ゴメンなさい、次回からは実況中継的にわたしと優香さまの毎日を語っていくので、とにかくいまは、あれ、リボン？ どこ？ ブラウスはこっちに掛かってるから

第3話：モツタイナイ

遅くとも7時45分までには屋敷を出る。

普通の生徒と同じように、なるべく電車で通う。

以上が優香さまとわたしの朝の取り決め。

わたしはごく大雑把に身支度を済ませ、食パンを口にくわえて玄関にすべりこんだ。腕時計を確認。43分！

「おふあおふあふあいまうゆうふあふあま（おはようございます 優香さま）！」

玄関脇の大窓から庭園を眺めていた優香さまがゆったりこちらに振り向いて苦笑する。レースのカーテン越しに朝の光を浴びて、透けるような白い肌をまぶしくかがやかせる優香さまは、魔女なのに天使のようだ。ちなみに、人間があがめる天使とか神さまとかは、いるのかいないのかよくわかりません。まあ、あれらはきつと心の内に見出される存在なんでしょうね。

「おはよう、黒子。……あらあら、もう、どうしたの？ リボンはずれてるしボタンはかけちがえてるし、それに、その、ふふふ、食パンくわえて登校なんて、まるでマンガじゃないの」

「あう、もぐ、そのう、ごめんなさい」

わたしはおっちょこちよいなところがあってよくない。中学時代もいろんな人たちから「お姉さんを見習いなさい」なんて言われてきた。わたしはもちろん、優香さまを見習って、というより、お側に控えて優香さまが恥ずかしくないようにしたいと思っているのだけど、なんでかこう、ドタバタしてしまうのだった。

しゅんとうなだれると、優香さまがスツと一歩近寄って、リボンのズレをなおしてくれた。わたしは食パンをもぐもぐおぼっていて、まったくかわいそうなコ状態だ。

「ボタンは自分でなおしてね？」

照れてるような、からかうような、微妙なニュアンス。優香さまは両手を後ろ手に組んで、くるりとわたしに背を向けた。

一応、私も男の子だからね。背中がそう語っていた。

ときどきですけれども、優香さまはご自分の性別について語られます。いわくは、

「私は自分が男なのか女なのか、よくわからなくなることがあるの。もちろん、魔女なんだから、女としての自分をいつも意識しているんだけど、でもね、そういうふうを意識すればするほど《本当の自分》が心の奥で浮き彫りになるのよ。でも逆に、私は男なんだ！って、そういうふうな方向付けで自分をとらえるのにも強烈な違和感が生じる。でも、まあ、わたしの場合、生きていく上で性別なんてあんまり関係ないのだけれどね……」と。そう語る優香さまはさびしげで、いまにも消えてしまいそうなのはかなさをたたえていました。わたしはいつもなにも言えなくて、抱きしめたいけれどそれもできなくて、ただじつと控えて心に誓うことしかできない。ずっと優香さまのお側にいよう、優香さまを独りにしちゃいけない、と。

わたしはあわててボタンをかけなおし、食パンをたいらげた。

「あの、では、参りましょう。失礼しました」

「ん。今日は……っていうか、今日もいい天気ねえ。すっごく暑そ

う」

空調の効いた邸内にあっても、夏日影の主張する熱気はごまかしようがない。わたしも優香さまも暑いのは苦手だった。

「ああ、黒子はショートボブでラクそうよねえ。私も思いきって短くしようかな」

靴べらを手に取りながら、とんでもないことをおっしゃる！

「だめ！ 絶対だめですよ優香さま！ もったいないですよ。M o t t a i n a i ですY O !」

「な、そんな、黒子は大げさねえ」

「大げさでないです！ 優香さま、すつごくお似合いなんですからね！ 奇跡のナチュラルウェーブ！ 脅威のローレイヤー！ 最強のAライン！」

優香さまのゆるふわナチュラルロングは芸術の粹に達している。ウィッチハットをかぶられたときのかわいらしさは危険球レベル！ 魔力なしで万人を魅了する！ 優香さまのロングヘアはわたしが守る！

「な、なんだかよくわからないけど、わかったわ。とにかくもう、いそぎましよう。遅刻しちゃうわ」

腕時計を確認すると7時47分。早歩きでないと電車に乗りおくれしてしまう。わたしも自分のローファーに足をさしいれ

「いつてらっしやいませ」

「わあ！」

いつのまにあらわれたのか、背後から執事の黒崎が見送りの声をかけてきた。

「びつくりさせないで！　いつからそこにいた？」

「黒子嬢、あなたが食パンを咀嚼していたあたりからありましたよ」

黒崎は人狼の老紳士で、西園寺家の執事として雇われている。とくに上下関係はないのだけれど、一応わたしの大先輩にあたる。

「いつてきます。黒崎さん、いつもお見送りありがとうございます。さ、黒子、行きましょう」

「は、はい！」

なんだか黒崎にしてやられた感じがして気に食わなかったが、ここで言い合いをしていたら本当に遅刻してしまう。わたしは優香さまにつづき、西園寺邸を後にした。

第4話：謎の結界

7時57分。通勤タイムの銀座線の混み具合はもはやスシ詰めどころの話ではない。わたしたちは女性専用車両を利用しているので一般車両よりはまだマシだが、それにしてもヒドイあります。新橋で吐き出されるように降車する人びとの数も異常だ。わたしもそのなかのひとりなのだけど、「これだけの人間がこのちっぽけな電車に入っていたとは！」と日々驚嘆の念を禁じえない。

優香さまは電車が苦手で、人いきれに酔いがちなものだけど、「黒塗りベンツで通学なんて感じ悪いわ。それに、乗り換えを含めてもたったの3駅じゃない。もっと遠くから通学している人もいるんだから、あんまり贅沢言っちゃダメよ」とのこと。ウィッチブルーム（ホウキ）で飛行通学なんてもつてのほか。でも、優香さまほどの魔女が満員電車にゆられて高校に通ってるなんて、なんだかなあ。

《 JR線、都営地下鉄浅草線、ゆりかもめはお乗り換えです。》

新橋到着。ばたばたばた、人びとのものすごい足音が構内のかん高いアナウンスと入りまじって、朝の喧騒を強調している。わたしたちは浅草線に乗り換えだ。

「眠いなあ」

ぼつりとつぶやく優香さま。魔女用頭痛薬『グルナール』がばつちり効いているようだ。

「大丈夫ですか」

お顔をうかがうと、優香さまはふるふる顔をふり、つづけて両手を上げて伸びをした。

「んんん。ごめんごめん、ついばいちゃった。いつものことなのね」

「え、あ、いえ、そんな」

優香さまはごく何気ない動作がかわいすぎるので注意が必要だ。わたしは通りすがりに見とれている会社員や男子学生をギロリとにらんだ。

8時17分、清應到着。予鈴の鳴る前とはいえギリギリだ。

「すみません、優香さま。わたしがちゃんとしていれば、こんなあわただしい朝にはなりませんのに」

遅刻したことはないけれど、結構な頻度で今朝みたいになってしまう。

「いいのよ。ちゃんと間に合っているもの。それに、黒子は45分までには必ず起きてくるじゃない。約束を破ったことは一度もないわ。あとね、外では“優香さま”じゃないでしょう？」

「あう。ごめんなさい“お姉ちゃん”」

そう、繰り返しになってしまいますけれども、わたしは人間社会においては優香さまの妹なのです。戸籍上もそういうことにな

っています。ホント光栄すぎて鼻血が出そうです。

「ふふふ、行きましょ」

「はい……あれ？ あ、あれ？」

校舎に入ろうとしたのだが、妙だ。優香さまも気づかれたらしく、立ち止まっている。

「変ね。結界？」

「そう、ですね。かなり歪なかたちですけど」

魔力を視神経に集中して見ると、微弱な結界の線が浮き上がってきた。カモフラージュされているわけではなく、単純に力が弱いだけめ気づきにくい。

生徒たちが立ち止まるわたしたちを不審げに見やりながら通りすぎていく。あ、言い忘れてましたが、清應は共学です。

「時間がないわ。とりあえずわたしたちのなかでだけ無効化しておいて、様子を見ましょ」

「そうですね。この弱さなら効果がなんであれ無効化できますし。それに解除したら術者にばれちゃいますもんね。でも、なんでしょうね、また九鬼さん関係でしょうか」

九鬼さんは3年B組に在籍する吸血鬼、九鬼影雅のこと。東日本亜人協和会に所属する九鬼家の一人息子です。父親の九鬼影光は協和会の戦団に多くの戦士を投入している有力者で、なかなかの人格者でもあります。表向きはレコード会社・九鬼グループの社長

さん。ちなみに、西園寺家は代替血液を提供している兼ね合いで九鬼家をはじめとした吸血鬼の名家と友好的です。

ただ、九鬼家と仲がよいといっても、息子の九鬼影雅はぼんぼん育ちのどら息子といった感じで、わたしは大きらいです。あのナンパ野郎は、なにかと優香さまにちょっかいを……！

「うーん、九鬼さん？　どうかしらねえ。あら、えっと、どうしたの？　怒ってる？」

「へ？　あ、いや、いえいえ、そんなことないですよ？」

ああ、わたしって九鬼さんのこと、本当にきらいなんだなあ。ちよつと解説しただけで、こう、イライラつとしてしまう。気をつけなくては。

キインコオンカアンコオオオン

予鈴の音が響き渡る。

「あらあらいけない、黒子、いそぎましょう」

「はい！」

謎の結界の出現……トラブルの予感がする。大切なのは、優香さまの日常を守ること。魔女の力を行使せずに事なきを得ることだ。ぬかるな黒子！

第5話：即戦闘？

新校舎三階の西側に位置する1年A組がわたしたちのクラスだ。本鈴間際の到着となつてしまったのだが、教室の引き戸を開けると……なんだろう？　ちょっと雰囲気がおかしい。この時間になると、みんな自分の席に着座しはじめるのが常であるのに、今日は立ち話に興じたままで、ワイワイガヤガヤといやにうるさい。

「なんか　」

妙ですね、と優香さまに声をかけようとしたところ、

「おはよう、西園寺さん。今日はぎりぎりね」と、山田の挨拶にさえぎられた。

山田はクラス委員を務める典型的優等生で、優香さまとわたしの共通の友人です。セルフレームのメガネが似合う、地味にオシヤレな文型ガール。わたしの心のなかでは“メガネの山田”。下の名前はなんだっけな？

「おはようございます、山田さん。今日はみんなどうしたのかしら？」

優香さまはクラス全体を見回すようにして言った。

「あ、そうなの。あのね、うちのクラスに転校生が来るんですつてめずらしいでしょう？　さっき日誌を取りに教員室に行ったときにね、先生が『おい、山田、今日は転校生来るからな』って。それでここに帰るとき、ちがう制服の女子とすれちがったの。たぶんこの子だろうなあって思って、みんなに話しちゃったんだ。そしたらね、

西園寺姉妹よりかわいい子だったらどうするよ！って男子がさわぎだしちゃってさあ」

アハハ、と笑って答える山田。

転校生？ 夏休みが終わって数週間が過ぎたいまになって？ そもそも、この私立清應高校に転校なんて不可能なのでは？ あきらかにおかしい。

キインコオンカアンコオオン

本鈴が鳴った。

「……ちよつと」

優香さまがわたしの耳もとに口を寄せ、ささやいた。

「たぶん、あの結界もどきの効果はこれよ。みんな転校生の出現を受け入れちゃってる。この学校では考えられないことだわ。いまからここに来るであろう転校生が術者にちがいない。“彼女”の目的がハッキリするまで、わたしたちは魔力を殺して結界にやられていくフリをしましょう。もっとも、先方がわたしたちをどうにかしようと思っただけで潜入しているのだとしたら、最悪の事態も考えておかなくちやいけないんだけど……」

「最悪の事態、というと」

言わずもがな。

「即戦闘よ」

しかたがないとはいえ、つらい。のんきな日常を愛する優香さまが、戦闘もやむなしと判断せざるをえない状況に追いやられているのだ。どうしても暗い気持ちになってしまいが、しかたがないことはしかたがない、そのときとなればわたしも全力を尽くす。最善のかたちで勝利せねばならない。“なにものも失ってはならない”のだ。

「では、そのときは即座に記憶操作のための簡易結界を張りましょう。なにも起こらなかったことにするためには必要です」

「そうね。それが一番安全な方法だと思う。私は“眼”を使います。相手の力量にもよるけれど、たぶんすぐに拘束できると思う」

優香さまほどの力があれば、多くの敵対者を無傷で生け捕れる。あとは精神を侵して自白させれば……いやいや、それは、優香さまがすべきことではない。そういうエゲツナイのは、わたしや黒崎の仕事だ。

「ないしょ話？ 朝っぱらから妬けますね。なかよし姉妹もいいけれど、ほどほどにね」

山田がやれやれ、といった感じで肩をすくめて言った。なかよし姉妹！ なんと甘美なる響きか……！

「こおら、なに赤くなってるの！」

優香さまは山田に弁解するように、人さし指でちゃんとわたしの額を押し、ニンマリ笑顔で言った。ちよっぴり照れてるらしく、わずかに頬を赤らめている。ああ、なんかこう、ものすごくクるものがあるなあ。えへへ。

ガラガラガラ！

教壇側の引き戸が勢いよく開いて、担任のカナミン（鹿波先生）が入ってきた。と同時に、生徒みんなが大あわてで移動しはじめる。イスや机がガタゴトガツタン、掃除の時間じやあるまいし、やかましいことこのうえない。喧騒にまぎれるようにして、わたしと優香さまも自席へと向かった。ちなみに、窓際が一番うしろが優香さま、その前がわたしの席です。

「ほらほら席つけ席つけ！ まったく、落ちつきのないやつらだなあ。委員長！」

「は、はい！ 起立！ 礼！ 着席！」

とんとん拍子でいつもの朝が展開されていく。しかし、開け放たれた引き戸に認められる転校生の影が“いつも”のままをゆるさない。敵か？ 味方か？ おそらくは敵だ。わたしは簡易結界の呪文を暗誦しながら、囲うべき空間を立体シュミレートした。触媒なしで、陣も描いてないので持続力に乏しいが、優香さまが瞬時に力タをつけてくれれば、その一瞬を中点としてみんなの記憶をこっそり抜ける。あとは拘束した敵を虚空間に閉じこめておけばいい。

「……黒子」

「は、はい」

詠唱イメージを保持しつつ返事をする。

「いきなり襲いかかってこないかぎりには知らんぷりだからね」

「は、はい」

「きつと大丈夫よ……」

左肩にそつと手をあてられた。緊張がやわらぐ。そうだ、冷静でいなくて、ここぞというときにトチってしまう。きつと、わたしの背中は気負ってガチガチだったにちがいない。恥ずかしいじゃない。こんなじゃ、わたしの方が守られてしまう。冷静に、冷静に

「もうみんな知っているだろうが、ここA組に転校生を迎えることになった。異例中の異例だが、中学時代は関東大会に出場したこともある剣道有段者ということだな、女子剣道部期待の星としてすでに入部が確定している。その兼ね合いで本校も転校を受け入れたわけだが、もちろん、そういった事情をさっぴいたうえで転校試験を受けてもらい、これまた見事にクリアしている。文武両道とはまさしく、といったところだな。まあ、とりあえず自己紹介をしてもらうか。おい」

カナミンにうながされ、引き戸の影が教室に足を踏み入れた。

第6話：冷ややかガール

背丈はわたしより高く、優香さまよりちよつと低い。目算で165センチ程度。ヘアスタイルはいまどきめずらしいポニーだが、高い位置で結んでラフに散らしているのだからオシャレだ。おくれ毛の残り具合が逆三角形のフェイスラインとやや切れ長な“おめめ”によく似合っている。全体的な印象としては「人を寄せつけないタイプの和風美人」ってところかなあ。優香さまのほんわか人を和ませる雰囲気とは真つ向真逆の冷ややかガールだ。あ、制服、セーラー服かあ。一度は着てみたかったなあ。

……って！ ルックスチェックしてる場合じゃないよ！

まあ、とりあえず、いきなり襲いかかってくるわけではなさそうだが。

ダン！ と音を立てて教壇を踏みしめる転校生。生徒一同、びくつと身を震わす。

これは……演出だ！

結界の力が総じて微弱な場合、回路を確実に形成し浸透させるのには虚仮おとしも有効。被効果者の意識が単線化すればするほど制圧しやすくなるからだ。つまり彼女は、結界の確認と後押しをしている。なんとわかりやすい挙動か。十中八九、こいつはクロだな。しかし……

「ん？ んんんん？」

転校生の全身を眺め見て、わが目を疑った。腰に……カタナ？

「……黒子！ 注目しちゃダメ……！」

小声の注意が背中から飛ぶ。そうだ、知らんぷり

「！」

一瞬、転校生と視線がバチツと衝突してしまったような気がするが……どうだろう？ 彼女のあごのあたりに焦点をずらし、漫然と見るともなく見る。腰のカタナは消えていた。なんだろう？ 幻術？ なんのために？

「……服部忍と申します。はっとりしのぶ静岡県は御殿場市より参りました。今しがた鹿波教諭よりご説明いただきましたよう、剣道部に所属し本校に貢献したく存じます。以後、お見知りおきを。なにかご質問は？」

教壇に立ち、胸を張って睥睨し、朗々と言い放つ。みんな金縛りにでもあったかのように身動きひとつできないでいた。服部は満足げにうなずくと、横目でカナミンをうながした。

「お、ああ、ありがとう。では服部くん、きみの席は一番うしろの真ん中だ。なにかわからんことがあったら……おい、委員長」

「は、はい！」

「クラス委員の山田だ。とりあえず彼女に聞きなさい。山田、よろしくな。時間があつたら、校内を案内してあげてくれ」

「はい。わかりました」

ふむ。山田を間に挟んで情報収集できるかもしれないな。

国語総合、

数学1、

英語2、

現代社会。

4 限終了。

淡々といつもどおりに授業がすすんでいった。とくになにごとも起こらない。

授業と授業の合間で軽薄な男子が服部にいろいろ質問していたが、けんもほろろにあしらわれていた。隣近所の女子が気遣うように声をかけるのには比較的やわらかい調子で応じていたようだけれど、それでも表情は頑固に硬い。あれがデフォルトなのか。

結界の効果はおそらく「転校生を受け入れるべし」といった感じの、ごくシンプルな想念の植えつけだろう。効果がみんなになじんで、事実として定着すれば結界も取り払われるにちがいない。力の源は結局のところ術者の魔力そのものなので、ただ設置してあるだけでもじわじわ消耗するし、術式構成をたどられると術者の魔力特性や居所が割れてしまうからだ。気になるのはチラツと見えたカタナだが、あれは一体……

「うつ……しゃかいのじかん、おわったの？」

優香さまのお目覚めだ。優香さまは『グルナール』の服薬により、いつでもどこでも5分以内で寝られるほど睡魔となかよくなられているため、生徒を指さない教師の授業はあっさり放棄しがちなのである。それでいて成績は学年トップなのだから、うらやましいと言っかなんと言っべきか……

「はい。お昼休みだよ。学食に行こう」

外では基本的にこの口調。いつまでたってもなれなくてドキドキしてしまうのだけれど、決まっていやではない。ある種の“ごっこ遊び”にすぎなくても、きつとやさしい思い出になるだろうから。

「はれえ？ きょうはおべんとうじゃあなかったあ？」

ふにやふにやした口調でズレたことを言う優香さま。起きたては意外にダメな人なのだ。それにしても、敵かもしれない奴がすぐ近くにいるっていうのに……大丈夫なんでしょうか？

「お姉ちゃん、お弁当は月水金でしょ。今日は火曜日だよ。席がなくなっちゃうよ」

「それはこまるっ」

ガタタツと音を立てて起立する優香さま。わたしは手を握って歩行をうながす（いつものこと）。クラスのみんなの生温かい視線に、射るような鋭い視線がまじっているのに気がついたが、あえて無視。優香さまがここまでぐにやぐにやにリラックスしているということとは、いまのところ「警戒しない方がよい！」ということだ。たぶん。

「ねっいいよ」

とりあえず、わたしは曖昧な状態にある優香さまの手をひき、地下一階の学食へと向かった。作戦タイム、かなあ？

第7話：脅威のカレー

清慶高校の食堂は美味しくて安い！

もちろん、西園寺家の料理長の腕前と比べるわけにはいかないのだが、小細工ゼロのごく素朴な味わいが優香さまを魅了しているのである。肉じゃが定食とか、焼き魚定食とか、西園寺邸ではまずお目にかかれないメニューがめじる押しだ。

ちなみに、中学は公立だったのだけれど、給食ではなく弁当持参が義務づけられていたため、三年間ずっと西園寺テイストなランチだった。牛乳だけ配布されていたのが謎だったな……

「お姉ちゃん、今日はなんにする？ わたしはカツカレー！」

かくいうわたしも、食堂メニューの不思議な味わいに魅せられているのだった。

はじめてこのカレーを食べたときはあたまが真っ白になった。西園寺家におけるカレーとちがって粘度が高く、しかもライスがバスマティ米（インディカ種）ではなくアキタコマチ！ それどころか……味わい自体がわたしのなかのカレー感覚にまったくむすびつかない！

以前、山田にその衝撃を伝えたら「唾棄すべきブルジョワがつ！」と罵倒されてしまった。つづけて「あきれたわ。食べたことないのはしょうがないにしても、マンガとか雑誌とかテレビのコマーシャルとかでさ、いわゆる“カレーライス”を知る機会くらい、十六年間生きてればいくらでもあるはずじゃない」とかなんとか。言われてみればたしかに。しかしそうは言っても、舌で理解すべきことを頭で理解することはできないわけだ。

あと、カツカレーに関して言えば、乗っかってるカツがすごい。衣が異常に厚くて、おそろしく油っぽい。単体で食べるとギトギト

で酔ってしまうのだが、このギトギトが見事カレーとハーモナイズ！ おしむらくは量が多すぎるのかな。わたしには半分くらいでちょうどいいんだけど、残しちゃわるいので無理して食べちゃう。そうすると西園寺邸の夕食を抑え気味にとらざるをえないわけで…なんとなく、料理長に申しわけないような気持ちになってしまう。なかなかむずかしいのだ。

「えっと、そうね、私は生姜焼き定食かな。あ、席を確保しておくから、お願いしていい？」

生姜焼き定食か、なかなか渋いチョイスですね。
どうやら優香さまの眠気は追い払われたようだ。眠いままだと「
くろことおんなじで」なので。

「了解。ちょっと待っててね」

「なんだかいつも、わるいねえ……」

お婆さんみたいな口調で優香さまがおどけるので、わたしは思わず吹きだしてしまった。

「いいのいいの！ それじゃ、席お願いね！」

小さく手を振り別れる。

ハッキリ言って優香さまは席を確保するのがヘタなので、逆の方が効率がいいのだが、優香さまに自分のご飯を運ばせるのは絶対いやだし、それに優香さまにはこういう……なんていうか、ごちゃごちゃしたせわしない空気になれてもらった方がいいような気がするのだ。

こうやって食券販売機の前に並びながら優香さまを眺めていると、

もう足どりからして他の生徒たちとはちがう。ゆったりしていて、優香さまのまわりだけ時間の流れがおだやかなのだ。ただ眺めているだけで、やさしくしてもらえたような充足感に満たされる。やわらかで、あたかみがある。しかし！ それゆえに……確保しようとした席を後からバタバタやって来た粗野な男子たちに取りられてしまうのである（いままさに）！ ああ、でもあのアセアセ困った表情、ホントかわいすぎるよ優香さま……

結局、同じクラスの男子に席を譲ってもらってしまった。

彼らとしては点数稼ぎの感覚があるのかもしれないけれど、優香さまは他人の好意をまことに善なるものとして率直に感謝し受け入れるので、裏側の意図に対してはまったくのブラインドなのだ。それに……これはおふざけ気分で言うのではなくて、優香さまは性別の意識を捨ててるから……。

「さて、どうしましょう。黒子のことはたぶん気づかれてるわ」

パックのウーロン茶を飲みながら、優香さまはさりとらった。

「うぐ！ ゴホッゴホ」

カツがノドにつまる。パックのオレンジジュースに手を伸ばした。

「カレーとオレンジジュースって、合うの？」

「んぐむ。ハアハア。いえ、まあ。あの、気づかれてるって……」

「あなたがフツの生徒ではない、ということ。つまり、アレが見

えたということだね」

アレとは、あのカタナのことだろう。優香さまはおどろかなかつたようだ。

「うう。ごめんなさい。ついびっくりしちゃって」

「いえ、私もおどろいたわ。不可視系のアーティファクトかなと思っただけ、なにかもつと不安定なもののように感じた。たぶん、私たちの領域外のものね」

「でも、あいつ、人間ですよ。たぶん」

「たぶん、ね。いまのところ、なにかも“たぶん”よ。こちらとしては出方を待つことしかできないしね。ただ、あんまりずるずるグレーゾーンにいられても対応のしようがないから、黒子があいいうかたちでチェックされたのはよかったのかも」

「と、言つと」

「つまり、服部さんは近々、あなたのことを確認しようとするはずよ。なにものなのかをね。彼女の目的がなんであれ、見られるはずのないものを見られたのだから、案外わたしたちよりずっとあせっているかも」

「え、でも、もしかしたらわたしたちそのものが目的……あれ？ いや、そうか」

「うん。もしも彼女の目的が私たちをどうにかすることだったら、あんなふうにアレをさらけだして、しかも見られてあわててかくす

ようなことはしないはずよ」

「じゃあ、敵ではない？」

「敵になるかもしれない人、というのが正しいかな」

「なるほど」

「とりあえず」

優香さまが表情を硬くする。わたしはピンと背すじを伸ばした。
「ご命令を！」

「冷めないうちに食べちゃいましょう」

「へ？」

「ごはん」

「あ」

優香さまがにつこり微笑む。テーブルに視線を落とせば、わたしも優香さまもまだ半分くらいしか食べていない。

「お姉ちゃんはいじわる……」

よくあることだが、からかわれてしまった。いやじゃないけど。

「ふふふ」

優香さまの時間はつねにおだやかに流れているのだった。

第8話：常識的な範囲

(1) 先方の接触を待ちつつ、こちらはあくまでも一般の生徒を演じる。

(2) 今日の放課後、三年の九鬼さんと会って本件の情報を共有しておく。

以上がお昼休みでの話し合いで決まったこと。

なお、九鬼さんに会うより前に服部が寄ってきてても、常識的な範囲でやりわりコミュニケーションを避けておくことにする。もしかしたら、九鬼さん関係のトラブルかもしれないからだ。巻きこまれるのはごめんである。

九鬼さんには優香さまが、

《こんにちは。西園寺です。校舎を囲っている結界もときには当然お気づきでしょう？ その件についてお話したいと思います。放課後、お会いできますか？ 駅前のスターバックスコーヒーで待ちます。》とメールを送っておいた。

ちなみに、優香さまは九鬼さんに携帯の番号までは教えていない。入学時にメルアド交換したつきりだ。優香さまの秘密に踏み込みかねない者は可能な限り遠ざけておかなければならない。

東日本亜人協会の懇親パーティーで知り合ってから、九鬼さんは優香さまのことをかなり気に入っているみたいだが、ハッキリ言っただけで迷惑！ 優香さまも「ちょっと苦手かな」って言ってるもん。

返信はすぐにきた。

《了解した。できれば二人っきりで会いたいんだがなあ。》

優香さまはあきれてため息。わたしは「黒子邪魔」という裏腹の文意に腹を立てた。

キインコオンカアンコオオン

6 限終了。すべて世は事も無し、だ。

さきほど食堂から教室にもどったとき、授業がはじまる前に山田にさり気なく聞いておいたところでは、服部の放課後の予定は剣道部関連の挨拶だか稽古だかで埋まっている。

「清應名所めぐりは明日だねえ」と、いままさに山田が服部に話しかけているのが聞こえてきた。

「うあ……かがくのじかん、おわったの？」

優香さまのお目覚めだ。

「はい。もう放課後だよ。スタバに行こう」

「……ふたばってなぬの？」

だめだ。いまの優香さまはかなりダメだ。

「黒子ちゃん」

「へ？」

突然声をかけられ振り返ると、山田と……服部だ！

「あのさ、服部さんが黒子ちゃんと話したいって」

な……なに言ってるのこのメガネ？　すごく迷惑なんですけど？

「え、ちょ、ほら、わたしさ、お姉ちゃんがこんな具合だからすぐに帰らなきゃ大変！」

優香さまはカクンと首を横倒しにし、ゆらゆら危うげに身体を揺らしている。睡魔と戦っているのだろうか？

「え、西園寺さんならいつものこムギヤ！」

思わず山田に飛びついて首を極めるわたし。おおやまだよしんでしまうとはなさない。

余情報。優香さまはみんなに西園寺さんとか優香さんとか呼ばれていて、わたしは黒子とか黒子ちゃんって呼ばれています。いっしょにいるときは西園寺姉妹でひとくり。

「……わかった。それでは、明日また」

服部はまったく動じず、無表情にそれだけ言つと、きびすをかえして教室を出て行ってしまった。ポカーン。拍子抜けだ。

「ゲホ、ちょっと！　黒子！　いきなりなにをするの！　死んだらどうするの！」

復活した山田が涙ぐんでまくしたてる。

「ごめんごめん。つい、ほら、こう、ね！　わかるでしょ？」

「ぜんぜんわかんねえよ！」

なにはともあれ、うまく切り抜けた。山田のおかげか？

「ありがとう山田！」

「なんだそりやなめんな！」

おお、怖い。このメガネ、結構本気で怒ってるぞ。

「ところで服部さん、なんだって？ どうしたの？ どういうこと？」

「チッ！ ごまかしやがつて。まあいいわ。あのね、ちょっと気になることがあるって言ってたわ。それだけ。黒子の方では心あたりないの？」

「ないないない。ゼンゼンナイヨー」

即答。

「ふうん。ところで、お姉さんが掃除の邪魔よ」

指摘されて優香さまに振り返ると、あらかわいい！ 組んだ両手を胸元に添え、小首をかしげるようにして眠っている。おいたわしや。睡魔に負けてしまったんですね。

写メろつと携帯をこそこそ取り出している掃除当番の男子らを追い払い、優香さまの耳もとに口を寄せた。

「お姉ちゃん、朝ですよお」

「んーん」

「お姉ちゃん、朝ですよお」

「んーん」

「お姉ちゃん、朝ですよお」

「んーん」

しかたがない。

「お姉ちゃん、朝ですよお。フッ」

耳に息を吹きかける。

「ん！」

おおお！ と周囲の男子がどよめく。優香さまは驚いてぴよこんと跳ね起きた。

「なに？ なに？ あれ、あの、どうしたの？ あ、わ、私ったら、その、ね、ねむくて……」

瞬時に状況を把握した優香さま。声はか細くお顔はまっ赤である。ちよつといじわるな起こし方だったかもしれないけれど、九鬼さんとの約束があるからいそがないと。

「それじゃ、バイバイ、また明日！」

強引に挨拶。きゅつと優香さまの手を握る。「さつさと帰りましよう」の合図だ。

教室を去り際、優香さまが赤面したままみんなに小さく手を振ると、同じく赤面気味の男子らが、おのおのもごも曖昧にサヨナラを返したのだった。やれやれ。

第9話：人間が好きです。

「わたし、バニラクリームフラペチーノ。トールで」

「私はこのヘーゼルナッツソイラテをアイスでお願いします。サイズはショート」

「俺、アイスコーヒー。トールね」

運よく窓ぎわの四人がけが空いていた。わたしと優香さまは並んで座り、九鬼さんに向かい合った。

「それで、どうしたって？」

九鬼さんはわたしがいるので機嫌が悪い。使い魔ふぜいが同席しやがって！ そんな視線を感じる。わたしとしてはべつに、九鬼さんに対してへこへこおもねる必要なんてこれっぽっちもないから、コンニャロと堂々にらみかえすわけだけれども。

「はい。あの結果。あれは九鬼さんに関係するものでしょうか？」

「なんだ、俺はてつきり君がなにか実験でもしてるのかと思って無視したんだがなあ」

九鬼さんはキザったらしく銀髪をかき上げながら言った。どうやら関係ないらしい。

「ということとは」

「ああ、俺はなににも知らない」

「そうでしたか。実は私のクラスに転校生がありまして」

優香さまは簡単に事の経緯を説明した。

「つまり、この黒猫がドジって目を合わしちゃったが、まあ怪我の功名、と」

あごでしゃくるようにして、なじるように九鬼さんは言った。

「黒猫じゃない。わたしの名前は黒子です!」

「たかが使い魔がえつらそうに」

あきれたようにそっぽを向いて、ストローをくわえる九鬼さん。

「うまく隠しているようだがな、おまえの尻尾と翼、俺にはよく見えるぜ」

「!」

あわてて後ろ手に背中とお尻をチェックする。

「へっ、冗談だよ」

「冗談だって? わたしは事実、真の姿を隠している。蝙蝠の翼と黒猫の耳、そして二股に分かれた尻尾を持っているのだ。人間社会

に生きるため、つねに徹底して隠している。本当に見えたのだろうか？ 魔力看破から推知したのだとしても異常な精度である。しかも、吸血鬼の力が弱化している日中であるにもかかわらず。こいつ……危険だ。

「九鬼さん。この子の名前は黒子です。無礼はゆるしません」

優香さまが微笑んで……お、怒ってる？

「無礼？ 俺が？ こいつに？ おいおい」

九鬼さんが中空で片手をぶらぶらさせて言った。

「無礼はゆるしません。“たかが使い魔”と」

一瞬、空気が凍る。優香さま……

「……ふん。あやまりはしないがね、今後からかうのはよしておこう。君のためにな」

「ご丁寧にわたしをひとにらみして、九鬼さんは言った。

「感謝します。それでは、話をもどしましょうか。と言っても、すでに共有すべき情報は底をつきましたけれど」

「服部、だっけ？ どうする？ 消すのかい？」

物騒なことを言う。こいつ、本当に九鬼影光の息子か？ 発想が邪悪すぎる。

「……九鬼さん、彼女はおそらく人間です。目的はわかりませんが、できることなら傷つけずにすれちがいたい」

「人間だからなんだってんだ。結界張ったり、わけのわからんものを見せたり、こっちの領域に足を踏み入れてるやつをかばうつもりか？」

「彼女が私たちに害をなそうとしているのだとしたら“対応”しなければなりません、そうでないなら、たとえ私たちにとって都合が悪くても、決して関わってはならない。九鬼さんは今回のことに手を出さないでください。情報は逐一提供します」

「やれやれ、人間のフリをして、それが共存か」

九鬼さんは眉間に皺を寄せ、吐き捨てるように言った。

「私たちもよく“フリ”という言葉を使いますが、正確には決してフリではありません。私たちは人間でいられる、ということです。私たちの能力は私たちの領域においてのみ在ればいい」

優香さまの声は静かな、落ち着いたものだった。

「ばかな。この能力があつてこそ、影から人間を支配できようものではないか。それが“共存”だろうか」

「それは“共存”でも“支配”でもなく、単なる“寄生”でしょう。幼稚な乗っ取り行為に過ぎませんよ」

「ちがうね。種間競争の問題だよ」

「……九鬼さん。私は人間が好きです。人間が育んできたものがまぶしい。私たちの力に意味があるとしたら、それを守ることではありませんか？ それを奪うことではなく、慈しむことではありませんか？ 力に驕り、魅せられ、短絡的な欲求に埋没するのだとしたら、それは人間の醜い一側面を模倣しているにすぎません。私たちが感得すべきものは、人間たちの“愛”ではありませんか？」

わたしは思わず優香さまの横顔を見つめてしまった。遠い視線と、はかない微笑がわたしの胸を打った。優香さまはテーブルの下でそつとわたしの手を取り、やんわり握ってくれた。

「愛？ 愛なら、おれたちにもあるだろう？」

なぜかうつたえるようにして、九鬼さんは言った。

「いいえ。残念ながら」

「たとえば……そうだな、血族の愛を信じないのか？」

「《真の始原的統一は相違の意識のなかにこそある。その統一を、すべての者は充実したいと願い、またおのおのに与えうるちからがある。ぜひなく、わたしたちはすべての者を愛さなければならぬ。わたしたちはおのおの代替不能の個体ではあっても、巨人でも神でも小人でもなく、ひとつの変わった異種同型体であるのだから。わたしたちはみな誰もがそうであることを知っているがゆえに、お互いに愛し合うことができる。……》」

「な、なんだ？」

キョトン。九鬼さんもわたしも同じ表情をしていたと思う。

「死んだ英国詩人の、ある長詩から。九鬼さん、おわかりになりますか？」

「わからんね」

やれやれ、と言わんばかりのバタ臭いジェスチャーをまじえ、九鬼さんは深いため息をついた。

「人でないものの話はこれくらいに。あとは、これを飲み終わるまで閑談といたしましょう」

そう言うと、優香さまはいつものようにやわらかく微笑した。急に空気が軽くなる。店内のざわめきに空気が同調する。会話のインシアチブは終始優香さまが握っていたようだ。

「なあ。やっぱり携帯の番号教えてくれないか？」

アイスコーヒーをすすりながら、ふてくされた声でアプローチする九鬼さん。

「メールで十分でしょう？」

「じゃあ、今度のライブ観に来てくれないか？」

おいおい、「じゃあ」ってなんだよ？

「門限がありますので」

うお！ 門限なんてないのに……優香さまエライ！

その後は、わたしと優香さまで九鬼さんをからかって過ごした。
なんのへんてつもない放課後。フツの高校生ライフを楽しんだ。

九鬼さんはいけ好かない野郎だけれど、ふむ、あえて三枚目に
甘んじる程度の度量はあったようですね。

第9話：人間が好きです。（後書き）

W y s t a n H u g h A u d e n “ N e w Y e a r L e
t t e r ”

第10話：泣き虫

ドライヤーで髪を乾かしていると、ベッドに放っておいた携帯が鳴った。この音は優香さまのメールだ。ちなみに、西園寺邸のすべての私室にはバスルームが設けられています。雰囲気は、帝国ホテル東京のモデレートルームに近い感じ。ホームページに写真が載ってたんで検索してみてください。

タオルでくしゃくしゃ髪の水つ気を取りながらベッドに腰を下ろす。携帯を手に取った。

《就寝前に私の部屋に来てください。服部さんの件で打ち合わせがあります。》

ついでに数学1の宿題も持っていこう。あと、お借りしていたDSソフトも返そうと。

薄暗い回廊の奥の奥、北翼行き止まりの部屋が『YUUKA'S ROOM』である。その手前が『京香亭』。京香さまは大阪出張でしばらくお留守。西日本亜人協和会の有力魔女である行徳静恵さまと会合だとか。

静恵さまのひとり娘である麗さまいづみは現在中学二年生で、優香さまによくなついている。夏休み中、麗さまがこちらに遊びにいらしたとき、わたしと優香さまで江ノ島水族館に連れて行ってあげて、めっちゃくちやよろこばれた。ああ、楽しかったなあ、夏休み終わっちゃったんだよなあ……

コンコン

ノック、ノック。すぐに「どうぞ」とうながされる。

ドアを開けると、書斎机から立ち上がってこちらに歩み寄る優香さまが見出された。ペイズリー柄のパジャマはシルク生地で大人っぽい。というか、なんというか、妖艶というか……しかしつくづく優香さまのお身体は謎なり。肌はすべすべだし、すごい細身だし、なんか、む、胸もちよこつとあるような？ ひんにゆう？ ステータスか？ いや、ん、どうだろう？ ああ、でもそんなこと聞けないしなあ

「どうしたの？ あ、黒子もお風呂上がりね、湯冷めしないように気をつけて」

「へ？ あ、う、はい」

片手を頬に当てると、ものすごい火照ってた。ばかだわたし。

「あ、優香さまコレ」

DSソフトを渡す。

「あれ、『リズム天国』貸してたっけ？」

「はい。なかなかおもしろかったです」

「ん。ありがと。あれ、それは？」

脇に挟んだノートと教科書に気づかれた。

「あのう、数1の宿題なんですけど……」

「まだやってないの？」

こくんとうなづく。

「じゃあ、そつちが先ね。私の机を使いなさい。わからないところがあつたら言いなさいね。教えてあげるから」

こくんとうなづく。小走りに机に向かった。

優香さまはベッドに腰かけ、サイドテーブルの文庫本に手を伸ばした。『ディケンス短篇集』かあ。

かりかり

ぱらり

ちくたく

かりかり

ぱらり

ちくたく

わたしのシャーペンの音と、優香さまがページをめくる音、それと時計の音だけ。現在時刻は9時25分。静かだ。

「ねえ、優香さま」

「うん？」

なんとなく、声をかけてしまった。どうしよう。

「あの、えっと」

「うん」

身をひねって振り返ると、優香さまは文庫をぱたんと閉じた。

「そ、その、今日の放課後のこと」

「ええ」

「人間が好きだって」

記憶がカチツとはまって、するする思考がつかっていく。不思議だ。

「ああ」

「わたし、そういうこと、ちゃんと考えたことなくって、ただ人間のフリして人間となかよくなるのが楽しいからって、そのくらいしか頭になくて、だめだなあって……」

しどろもどろに言うと、優香さまはいつもの笑顔を浮かべた。

「なかよくなるのが楽しいと思えるのはとても大切なことだわ。あとは言葉の問題よ。もちろん、言葉があってわたしたちは考えるわけだから、その言葉によって裏づけられる想いや、あたらしい感情の発見はあるけれどね、でもそういうのは少しずついいのよ」

「でも」

「悩んだり考えたりすることはすばらしい。でもね、自分のなかになにか欠落を感じて閉塞的に煩悶するのは不健康よ。それにね、私には私の考えがあつて、あなたにはあなたの考えがあるのよ」

「え、でも、わたしは優香さまの考えに従いたい……」

突き放されたような気がして、わたしはさすがのように言った。すると優香さまはゆっくりと立ち上がってわたしに歩み寄る。両肩にそつと手がのせられた。わたしは机に向きなおり、包みこまれたような気持ちで目を閉じた。

「ふふ、そうね、こういうのはどうかしら？ 私はあなたに私が考えていることを教えられる。そのかわり、あなたはあなたの考えを私に教えて？ それならお互いに得るものがあつてフェアだし、得たものは二人のものになる。そして二人のものになったそれはお互いの心のなかで別々に変化していつて、でもだから、いつかまた、変わってしまったそれぞれを確認しあつて、ひとつにとかしあわせればいい。ね？」

「……う、く」

なぜか涙があふれてきた。悲しい涙ではない。ぜんぜん、そういうんじゃない。でも、自分がなんで泣いているのかわからなくて、わたしは言葉を失ってしまった。優香さまはわたしのあたまをそつとやさしくなでてくれて、それがまた涙を誘った。

「泣き虫さんね」

なぐさめるようなやさしい声。

「うっ、ゆうかさま……」

それからわたしはひとしきりぐじぐじ泣きつづけた。宿題は結局、三分の一くらいは優香さまに教えてもらい、残りは優香さまと式と答えの照らし合わせまでしてもらってしまった。

服部の件に関しては以下のことを厳守。

- (1) わたし(黒子)は靈感が強い、という設定で押しとおす。
- (2) 優香さまは魔力を徹底的に殺して一般生徒でいつづける。
- (3) わたし(黒子)は服部と二人きりにならないようにする。

第10話・泣き虫（後書き）

第11話：B型でしょ！

「放課後、屋上で」

4限が終わってすぐ、服部が声をかけてきた。

今朝はまた、わたしのバタバタのせいで本鈴ぎりぎりの登校になってしまっていたし、授業と授業の間の休みは実験的に露骨に避けてみたから、服部もちよつとあせつたのだろう。さて、どう答えよう？ とりあえず「了解」かな。

「わか」

「った、と言おうとしたらば、

「いまここでもいいでしょう？ いっしょにごはんを食べましょうよ」と、優香さまがわたしをさえぎるように提案した。すると服部は目をぱちくりさせ、片手を口もとに寄せて思索しはじめた。想定外だな、といった感じ。

沈黙。なんとなくつらい。

「わたしたちは今日はお弁当だけれど……」

ふぐあ！　なんでわたしが助けぶねを？

「……ああ、そうか。私は食堂だ。放課後ではだめか？」

服部は腕を組み、ややうつむき加減に視線を落として言った。

「わか」

った、と言おうとしたらば、

「でも、屋上は生徒立入禁止ですよ。駅前のスターバックスではだめかしら？」と、優香さまがわたしをさえぎるように提案した。すると服部は目をぱちくりさせ、片手を口もとに寄せて思案しはじめた。想定外だな、といった感じ。

沈黙。なんとなくつらい。

「なんならわたしのおごりでもいいよ」

なんで？ なに言っちゃってんのわたし？ くうう……なぜかい！

「待ってくれ。すたあばつくすとは……なんだろうか？」

は？

「は？ スタバだよスタバ」

「黒子、ちがうよ。ええつと……あのね服部さん。駅前の喫茶店じやだめかしら？」

優香さまがやさしい口調で言いなおした。あ、そうか。そういうことか。いや、でも御殿場市にもあるだろ、スタバ。……服部め、あやしいぞ！

「ん？ ああ、喫茶店か。しかし、西園寺優香。優等生のきみが、

そんな不良のするようなことをしていいのか？」

「ちょ、おいおい、不良？ 放課後に喫茶店に寄って？ ありえないありえない」

わたしはすっかりあきれはて、片手を中空でぶらつかせながら言った。ありえないって。

「しかし」

「服部さん。そういうことなら大丈夫よ。それとも、喫茶店ではない理由があるのかしら？」

「……！」

一瞬、わたしたちと服部の間に冷たい空気が流れる。優香さまは天使の笑顔で小首をかしげているけれど。

「あとね、服部さん。服部さんは妹に“だけ”用事があるみたいだけれど、私も同席させてもらいますからね」

につこり。優香さまは魔力をほとんどゼロにまで絞りこんでいる。優香さまほどの超大な魔力を持っていると、湧出する魔力を抑えるのにも一苦労なはずなのだけれど、もはや傍らのわたしには検知不可能なほどだ。素質のある一般人の方がよっぽどわかりやすい。しかしそういえば、いま目の前に対峙する服部からも、魔力的な気配は感じられない。先日 of 教壇でカタナを視認したときも感じられなかった。ましていまは結界を張っている真っ最中なわけだから、とらえやすい状況のはず。

とすると、服部がクロなのを前提として推し量るならば、こいつ

もかなりの力量の持ち主。力の調節に長けているのだ。

「……わかった。放課後、その喫茶店に連れて行ってくれ」

「ええ。それでは」

服部は無言でうなづき、きびすをかえして教室を出て行った。空気がやわらぐ。すると遠巻きに見ていたのだろう山田が小走りに寄ってきた。

「ねえ、どうしたの？　なんだって？」

「べつつにい。血液型を聞かれたただだよ。そういうの好きなんじゃないの？」

われながらテキトーなことを言う。優香さまは「やれやれ」といった感じでこまったような微笑を浮かべた。

「血液型？　そういえば、西園寺さんと黒子ちゃんの血液型って？　あ！　待って、当ててみるから」

なんだ、山田もそういうの好きなのか。　ちなみに、魔女の血液型は人間と同じように峻別されます。使い魔の場合はいろいろですが、すくなくともわたしは人間と同じです。つくづく、超常種は不思議な生き物だなと思いますね。

「はいはい。当ててみ」

「黒子ちゃんはB型でしょ！　いや、むしろ《ドB》って感じね。気分屋で落ちつきなくて感情的でドジでマヌケだもん」

こいつ……

「西園寺さんはA B型ね！ 繊細でやさしくて、それでいて客観的で、なにより天才肌！ あと、おとなしいようでいて自分の考えをはっきり主張できる人！」

優香さまはこまり顔で、ほんのり頬を赤らめた。

「どうよ」

なぜか見下すような視点で山田は言いくさった。

「ちえ！ 合ってるよ」

「へっへえん！」

鼻高々だ。

「……山田は絶対B型だろ」

「よくわかったわね！ 意外じゃない？」

こいつ……

「まあまあ、ごはんを食べる時間がなくなってしまうわ。山田さんも私たちといっしょに食べませんか。お弁当でしょう？」

「そうね！ いま持つてくるからちょっと待っててね！」

そう言っでドタバタ自分の席へ走っていく山田は、まったく学級委員らしからぬ落ちつきのなさをかもし出している。しかしあいつ、ダメな子っぱいのに成績優秀なんだよなあ。まあ、優香さまの方が上だけだな！

「山田さんには、今日の放課後も服部さんは用事あるって言っておかなくてはね」

優香さまは学生鞄からお弁当を取り出しながら、つぶやくように言った。

第12話：嘘八百

「私はエスプレッソチョコレートトリュフをショートでお願いします」

「えっと、わたしはジャバチップフラペチーノね！ グランデー！」

「……」

笑顔の店員さん。沈黙の服部。そして、なぜかオロオロしてしま
うわたし。

「ど、どうしたの服部さん、なんにする？」

放っておけばいいのに、なんとなくおせっかいしてしまう。わた
しはどうも、寡黙なマイペース人間が苦手なようだ。

「……ああ、うむ。梅昆布茶を」

おい！ 思わず大阪人的ツツコミをいれてしまいそうになってし
まった。おまえなにいうとんねん！

「ああ、ええと、あのね、服部さん」

優香さまがやんわりやさしい口調で言った。

「……、そういうのはないの。このメニューのなかから、ね？」

「……ん？ ああ、なるほど。ふむ」

カウンターに置かれたメニューを見下ろす服部は、あいもかわらず無表情……かと思いきや、眉間にしわを寄せて真剣そのものだ。

「……むっ」

むっ。そして一分経過。おいおい服部、店員さんの笑顔がだんだんつらそうになってきてるよ。

「ええと、あの、服部さん？ 甘いのは大丈夫？」

見かねてか、優香さまが善意の誘導を開始。

「む、あ、あま……甘いのか……ふむ、甘いのはまったく嫌いではないぞ」

「それじゃあ……そうね、この抹茶クリームフラペチーノはどうかしら？」

そう言って優香さまがメニューを指し示すと、服部はじつと食い入るように商品の写真を注視した。なにを力んでいるんだか。

「それでは、この抹茶くりいむふらちぺえのにしよう。サイズは一番大きいものを」

「え。一番大きいのって、あの“V”ってやつ？」

V＝ベンティ＝590cc。あ、ちなみにグランデは470ccです。

服部は「うむ！」と力強くうなずいて、わたしの顔をじつと見つ

めた。

「な、なに？」

「……黒子、あなたのおごりでしょう？」

クスツといたずらっぽく笑って優香さまは言った。おぼえてたのか……

昨日と同じ窓際の席が空いていたので、わたしたちはまたそこに腰を下ろした。わたしと優香さまが並んで座って服部に対峙。位置関係も昨日と一緒だよ。

「さて。西園寺黒子」

「あー、黒子でいいよ。っていうか、フルネームは変でしょ。わたしももう服部って呼ぶから」

「そうか。では黒子。君はこれまで……いや、単刀直入にいこう。見ていてくれ」

そう言っ、服部は握り締めた右こぶしをわたしの目の前に突き出した。

「な、なんだよ」

動揺のそぶりを演じながら、わたしは服部がアレを見せるつもりでいるのを十全と察知していた。優香さまは悠然となんとかかんと

かトリュフを飲んでらっしやる。「我関せず」って感じ。

「……常行所当行自持必令強」

服部がぼそぼそとなにやらつぶやくと、ソレはまばたきの一瞬間にでも現れたかのごとく、突如として全的に具象化した。ゆるくゆらいだ刃紋が魔力的な燐光を放っている。……抜き身のカタナだ。わたしはあえて身をそらし、顔をこわばらせた。優香さまはまるでなにも見えていないかのように、不安げな視線をわたしに注いでいる。

「黒子。やはり君は……見えているな」

例のごとく無表情。感情が読めない。

「は、服部！ おまえナニモノダ！」

われながら思う、なんてわざとらしいセリフだろう！ しかもちよつと棒読みになってしまった。

「あわてないでくれ、危害を加えるつもりは」

「服部さん」

優香さまが服部の言葉を切り止める。たぶん、わたしの下手な演技では危ういと判断されたのだろう。スミマセン……

「あのね、服部さん。妹はいまのいままで、普通の人には見えないものを見てきて、すごくつらい思いをしてきたの。私にはなにもわからないけれど……わからないからこそ、この子を普通の、平和な

世界につながとめることができる、そう信じています。そしてこれからもずっと、そういう気持ちでこの子を守っていくつもりなんです。……わかりますか？」

ゆ、優香お姉さま。嘘八百なのに、わたしったら感動してます！

「……あ、う、うむ」

服部は優香さまのまっすぐな視線に圧されたかのように、弱々しく同意した。それとともに溶けるようにカタナが消える。

消え方といい現れ方といい、なんとなく不思議だ。自在性が使役的でない。あまりにも自然すぎる。

わたしや優香さまの魔力行使は弾丸を撃つようなもので、放った魔力は一時的に減殺されるのだが、服部のカタナは分離的でありながらも手足のように繋がっている。それがどこか奇妙に感じられるのだ。おそらく“チャンネルが違う”のだろう。

「私はあなたが悪い人間ではないだろうと判断したうえで、こうしてお話を聞くことに同意をしました。でも、もしもあなたが、あなたの問題に妹と私を巻き込もうとしているのだとしたらご容赦願いたいわ」

優香さまは、ほんの少し語調を強めて言った。わたしはうつむき加減に服部を観察しつつ、フラペチーノのホイップクリームを味わった。甘くて冷たく美味しい。

「ま、巻き込もうだなんて……思って、ない。ただ……」

とりあえず、優香さまの仰ったよう悪い人間ではなさそうだ。しかし、たとえ服部に悪気がなくても、こいつの抱えこんでいるもの

がわたしたちに害をなすことは大いにありうる。状況は悪くはなっていない。しかし、よくもなっていないのだ。

「ただ？」

優香さまが、視線をそらす服部の顔を覗きこみながらうなगत。

「ただ、警告と……その、頼みごとが」

「警告と、頼みごと、ですか。でもまずは、あなたが何者なのかを知りたいわ」

優香さまと服部の視線がぶつかり合う。

「わかった。順を追って話そう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1123f/>

めえる ういち

2010年10月11日01時02分発行